

## 論文審査及び学力の確認結果報告書

|             |                         |           |       |
|-------------|-------------------------|-----------|-------|
| <b>論文博士</b> | 地域社会研究科 地域社会専攻 地域文化研究講座 |           |       |
| <b>学籍番号</b> | 10GR-104                | <b>氏名</b> | 丸山 浩治 |
| <b>審査委員</b> | <b>主査</b>               | 関根 達人     | 印     |
|             | <b>副査</b>               | 小岩 直人     | 印     |
|             | <b>副査</b>               | 平井 太郎     | 印     |

**(論文題目)**

考古学的手法を用いた火山災害史研究  
—十和田10世紀噴火と東北北部の社会—

**(論文審査の要旨)**

阪神淡路大震災・東日本大震災以降、日本の歴史学では災害史が注目されている。考古学では火山灰が年代決定の鍵となることから、古くより「火山灰考古学」の分野が存在したが、近年は災害史の視点からの研究が増えている。丸山氏の研究は、そうした近年の災害史研究の延長線上にあるが、丸山氏が研究対象とした915年の十和田噴火に関してはこれまで本格的に考古学的検討はなされていない。

丸山氏は、青森・岩手・秋田の3県域の455遺跡で、十和田a火山灰とその直後の10世紀第2四半期に降下した白頭山-苫小牧火山灰との関係性がとらえられる3544棟の竪穴建物のデータを集め、建物跡と火山灰の堆積状況から時期区分を行い、地域ごとの遺跡数の増減の実態を導き出した。加えて建物の形態・様式と煮炊きの道具である土師器甕の変化に基づき、火山災害に対してそれぞれの地域集団がどのような行動をとったのかについて、律令国家との関係性を視野に入れて検討を行った。

火山災害に関しては、約7300年前に西日本を襲った鬼界アカホヤ火山灰、古墳時代後期に起きた群馬県榛名山の2度の噴火、1783年の天明浅間山噴火をはじめ、全国で様々な考古学的研究が行われているが、これほどまでのビッグデータを用いた研究はなく、本研究はビッグデータだからこそその強みをもつ。こうした研究手法は、今後、火山災害に関する考古学研究のスタンダードになるであろう。

本研究のもう一つの特色は、律令国家の支配の北限域にあたる10世紀の東北北部を研究対象に選んだことである。すなわち、郡郷制が敷かれ内国化された地域と、律令国家の直接的な支配を受けなかった地域を比較することで、同じような災害を受けたとしても、社会体制の違いによりいかなる差異が生じたかが明らかにされた。審査委員からは火山灰を用いた考古学的研究が単に被災状況の復元にとどまらず、災害後の人間行動、すなわち集団の移動にまで発展したことに対して、評価する意見が示された。

今後、白頭山-苫小牧火山灰の降下による災害とその対応について同様の手法により研究を進め、北海道の擦文社会と東北北部のエミシ社会との比較を行うことで、本研究はさらなる進化が期待できる。

論文審査に関して、丸山氏の論文は博士号の学位を授与するに十分な内容を有することを、審査委員全員一致で確認した。

**(学力の確認結果の要旨) 学力の確認結果日：平成31年2月1日**

弘前大学大学院地域社会研究科における学位論文審査方法等に関する申合せに従い、面接により学位論文及びそれに関連のある科目である考古学、自然地理学、社会学ならびに外国語の能力について学力の確認を行った。審査委員からは社会変化と火山災害との因果関係の認定はもう少し慎重に行うべきである、統計学的検討に関して遺跡の調査数の地域的偏りについて断り書きが必要である、論文の最初に本研究が対象とする10世紀前後の時代状況や東北北部の社会に関する概説的な説明があったほうが良いなどの意見が出された。質疑応答を踏まえ、丸山氏は博士の学位を授与するに十分な学力を有することを、審査委員全員一意で確認した。